

北海道に生育するカラフトモメンズルについて

札幌市 松井 洋

紋別郡遠軽町 林 廣志

はじめに

マメ科ゲンゲ属の一種であるカラフトモメンズル (*Astragalus Schelichovii Turczaninow*) は Goncharov (1946) によると、北極地方のアナジリ、東シベリアのアンガラーサヤン (北部地方)、レナーコリマ (主に東地方)、極東のカムチャツカ、オホーツク、ゼヤープレヤ、ウダ、サハリンに分布している。Schmit (1868) によるとアムグン、ネミレンのアムールにも分布している。

村田 (1984) よると中国北東部の北部大興安嶺ピストライヤ河流域、朝鮮半島北部の咸鏡北道地域等、および日本に分布している。日本での分布は古瀬義氏が 1979 年に本州・栃木県日光中禅寺湖畔千手ヶ浜で採集している。北海道の分布は菅原繁蔵氏が 1920 年に上川支庁中川町、加藤平八郎氏が 1977 年に網走支庁湧別町芭露で採集していることが報告されている。

杉本 (1978) には本州 (日光)、亜寒帯の湖畔、大場秀章編「日光地区高等植物目録」(1986) にはカラフトモメンズル、山地帯と報告され、環境庁自然保護局編「植物目録 1987」(1988) にはカラフトモメンズルの和名と学名が、記載されている。

我が国における保護上重要な植物種及び群落に関する研究委員会種分科会編「我が国における保護上重要な植物種の現状」(1989)、通称レッドデータブックにはカラ

フトモメンズルは栃木：日光中禅寺湖畔 (絶滅)、観光地化による自生地の破壊とあり、北海道は絶滅の危険がある危急種の一種にリストされている。

筆者らは (松井・林、1991)、網走支庁遠軽町湧別川と十勝支庁音更町の十勝川支流の音更川にカラフトモメンズルが生育していることを確認し、その新分布地として報告した。その後の調査において湧別川の下流域の上湧別町・湧別町、音更川の上流域の上幌町にも生育していること、さらに上川支庁名寄市を流れる天塩川に生育していることを確認した。ここにカラフトモメンズルの分布域と隣接する植物群の関連について述べる。

調査日および調査結果

湧別川の調査は 1989 年 8 月、1990 年 6 月と 9 月、1991 年 9 月、1992 年 8 月の延べ 5 回、音更川の調査は 1991 年 8 月と 1992 年 8 月、天塩川の調査は 1993 年 7 月と 8 月のそれぞれ 2 回である。

調査方法はカラフトモメンズルが生育している近隣の植物を記録し、それぞれの植物の頻度を求めた (写真、グラビア頁)。

その調査結果は湧別川の 3 地点 (上流の湧別川ダム、中流の野上橋、下流のイワネ大橋) と音更川の 3 地点 (上流の西上橋、中流の上幌新橋・音和橋、下流の駒場橋)

において、カラフトモメンヅルと隣接する共通の植物群を頻度によって、5段階に分けたのが表1-1である。表1-2は湧別川と音更川だけに出現した頻度の高い種をまとめたものである。表1-1,2.の出現種数は25科71種（うち帰化植物・移入木は22種）である。さらに天塩川に生育するカラフトモメンヅルと隣接している植物群は表2.に示した。出現種数は14科33種（うち帰化植物は21種）である。

考察

表1-1のカラフトモメンヅルと隣接する植物群の最も高い頻度V（100%）群はヒメスイバ、メマツヨイグサ、シロツメクサ、ムラサキツメクサ、ヒメジョオン、セイヨウタンポポと帰化植物が占めて、在来種はオオヨモギ、コウゾリナの2種のみである。次にやや高い頻度IV（83%）群でもナガハグサ、エゾノミツモトソウ、オオアワガエリ、ヒメムカシヨモギ、マツヨイセンノウ、ヤネタビラコと帰化植物がとりまき、在来種はツルヨシ、アキノキリンソウの2種である。高い頻度III（67%）群になると帰化植物はエゾノギシギシ、カモガヤ、タチオランダゲンゲと減少し、在来種はスギナ、ミミナグサ、クサフジ、オオバコ、オトコヨモギ、ウシノケグサと増加してくる。

カラフトモメンヅルと隣接する植物に帰化植物が多いことは、前回の湧別川の調査（1991）で出現植物59種の帰化率は33.9%と高かった。今回の調査の表1-1,2による出現植物71種の帰化率は31.0%であり、出現植物が多い分やや低くなっている。た

しかに帰化率は高いが、多摩川中流域における帰化植物の割合は、河原で29.3%、土手で21.4%を占めていることを考えると河原での帰化率としてほぼ同じといえる。ただ表2の天塩川に生育するカラフトモメンヅルと隣接する帰化率は63.6%と非常に高い。これはカラフトモメンヅルの株と直接に隣接している植物をとったからである。前回の湧別川でカラフトモメンヅルを主としたコードラードをとった調査では、10方形枠の出現種は18種で帰化率は44.4%と高かった。このときの植被率は65~95%で平均81%、1方形枠の出現種は6.4種である。天塩川の調査ではカラフトモメンヅルと隣接する出現種は平均10.7種とやや高い。これから考えるとカラフトモメンヅルと隣接する植物は平均9種でこの半数は帰化植物が占め周辺に混生している。

カラフトモメンヅルの生育環境は河原の砂礫地から大小の石がゴロゴロしているような礫地に生育していて、他の植物が生育しにくい不安定な環境である。河原は春先の融雪期の増水、大雨や台風の洪水による破壊作用のうける所であり、さらに護岸、築堤、河川改修などの工事によって、人為的に攪乱される環境でもある。村田(1988)によると、人為的な環境の変化で、まず消えていくのは在来種であり、在来種が消えていったあとへ帰化植物が生えてくるという。このことからカラフトモメンヅルの周囲には帰化植物が多く生育し、これが環境圧となって競争関係にあり、耐えて生育していることが観察される。

表1-1. カラフトモメンツルと隣接する植物群 (湧別川と音更川に生育する共通種)
 最も高い頻度群 V, やや高い頻度群, IV 高い頻度群 III
 やや低い頻度群 II, 低い頻度群 I *印 帰化植物

種名	湧別川			音更川			頻度(%)	
	上流	中流	下流	上流	中流	下流		
カラフトモメンツル	Astragalus	Schelichovii	+	+	+	+	+	V (100)
ヒメスイバ*	Rumex	Acetosella	+	+	+	+	+	
ムラサキツメクサ*	Trifolium	pratense	+	+	+	+	+	
シロツメクサ*	Trifolium	repens	+	+	+	+	+	
メマツヨイグサ*	Oenothera	biennis	+	+	+	+	+	
オオヨモギ	Artemisia	montana	+	+	+	+	+	
ヒメジョオン*	Erigeron	annuus	+	+	+	+	+	
コウゾリナ	Picris	hieraciodes subsp. japonica	+	+	+	+	+	
セイヨウタンポポ*	Taraxacum	officinale	+	+	+	+	+	
マツヨイセンノウ*	Melandryum	noctiflorum	・	+	+	+	+	IV (83)
エゾノミツモトソウ*	Potentilla	norvegica	・	+	+	+	+	
ヤネタヒラコ*	Crepis	tectorum	+	+	+	+	・	
ヒメムカシヨモギ*	Erigeron	canadensis	+	+	+	・	+	
アキノキリンソウ	Solidago	Virgaurea subsp. asiatica	+	+	+	+	+	
ツルヨシ	Phragmites	japonica	・	+	+	+	+	
ナガハグサ*	Poa	pratensis	・	+	+	+	+	
オオアワガエリ*	Phleum	pratense	+	・	+	+	+	
スギナ	Equisetum	arrense	+	+	・	+	・	III (67)
エゾノギシギシ*	Rumex	obtusifolius	+	+	+	+	・	
ミミナグサ	Cerastium	fontanum subsp. triviale var. angustifolium	+	+	・	+	・	
クサフジ	Vicia	Cracca	+	+	+	+	・	
オオバコ	Plantago	asiatica	・	+	+	+	・	
オトコヨモギ	Artemisia	japonica	・	+	+	+	・	
カモガヤ*	Dactylis	glomerata	+	+	+	・	・	
ウシノケグサ	Festuca	ovina	・	+	+	+	・	
タチオランダゲンゲ*	Trifolium	hybridum	+	・	・	+	+	
ネコヤナギ	Salix	gracilistylala	+	+	・	+	・	II (50)
オノエヤナギ	Salix	sachalinensis	+	+	・	・	・	
エゾヤマハギ	Lespedeza	bicolor	+	+	・	+	・	
ツルウメモドキ	Celastrus	orbiculatus	+	+	・	+	・	
イタドリ	Polygonum	cuspidatum	+	+	+	+	・	
ムシトリナデシコ*	Silene	Armeria	+	+	・	+	・	
シロザ	Chenopodium	album	+	+	・	・	+	
アキタブキ	Petasites	japonicus subsp. giganteus	+	+	・	+	・	
ムラサキエノコログサ	Setaria	viridis var. minor forma misera	+	+	・	・	+	
フランスキク*	Chrysanthemum	leucanthemum	+	・	・	+	・	
ナワシロイチゴ	Rubus	parrifolium	+	・	・	・	+	
ツユクサ	Commelina	communis	+	・	・	+	・	

ゲンノショウコ	<i>Geranium Thunbergii</i>	+	•	+	+	•	•
キジムシロ	<i>Potentilla fragarioides</i> var. <i>major</i>	+	•	•	+	•	+
スカシタゴボウ	<i>Rorippa palustris</i>	+	•	•	+	•	+
アカザ	<i>Chenopodium alubum</i> var. <i>centrorubrum</i>	•	•	+	+	•	+
ドロヤナギ	<i>Populus Maximowizii</i>	•	+	•	•	•	+
オオバヤナギ	<i>Toisusu Urbaniana</i>	•	+	•	•	•	+
クサヨシ	<i>Phalaris arundinaces</i>	•	+	•	•	•	+
ウド	<i>Aralia cordata</i>	+	•	•	+	•	•
タラノキ	<i>Aralia elata</i>	+	•	•	+	•	•
オオイタドリ	<i>Polygonus sachalinense</i>	+	•	•	•	•	+
セイタカウコギ* (アメリカセンダングサ)	<i>Bidens frondosa</i>	+	•	•	•	•	+
オオイヌタデ	<i>Polygonus lapathifolium</i> subsp. <i>nodosum</i>	+	•	•	+	•	•
ウスバヤブマメ	<i>Amphicarpaea Edgeworchii</i> var. <i>trisperma</i>	+	•	•	+	•	•
エゾノキツネアザミ	<i>Breca setosa</i>	+	•	•	+	•	•
ハルザキヤマガラシ*	<i>Barbarea vulgaris</i>	•	•	+	•	•	+
ノミノフスマ	<i>Stellaria Alsine</i> var. <i>nudulata</i>	•	•	+	+	•	•

I
(33)

表1-2. カラフトモメンズルと隣接する植物群(湧別川と音更川だけに出現する種)

*印 帰化植物・移入木

種	名	湧別川			音更川		
		上流	中流	下流	上流	中流	下流
コゴメハギ*	<i>Melilotus alba</i>	+	+	+	•	•	•
カラマツ*	<i>Lalix Kaempferi</i>	+	+	•	•	•	•
シラカンバ	<i>Betula platyphylla</i> var. <i>japonica</i>	+	+	•	•	•	•
サルナシ	<i>Actinidia arguta</i>	+	+	•	•	•	•
ヤチダモ	<i>Fraxinus mandshurica</i> var. <i>japonica</i>	+	+	•	•	•	•
カラハナソウ	<i>Humulus Lupulus</i> var. <i>cordifolius</i>	+	+	•	•	•	•
エゾノキリンソウ	<i>Sedum kamschaticum</i>	+	+	•	•	•	•
ヘラオオバコ*	<i>Plantago lanceolata</i>	•	+	+	•	•	•
オトコエシ	<i>Patrinia villosa</i>	+	+	•	•	•	•
カワラハハコ	<i>Anaphalis margaritaces</i> subsp. <i>yedoensis</i>	+	+	•	•	•	•
ススキ	<i>Miscanthus sinensis</i>	+	+	•	•	•	•
オニノゲシ*	<i>Sonchus asper</i>	+	•	+	•	•	•
メドハギ	<i>Lespedeza cuneata</i>	•	•	•	+	+	+
ミヤコグサ	<i>Lotus corniculatus</i> var. <i>japonicus</i>	•	•	•	+	+	+
ケショウヤナギ	<i>Cosmosia arbutifolia</i>	•	•	•	+	+	+
オトギリソウ	<i>Hypericum erectum</i>	•	•	•	+	•	+
タチツボスミレ	<i>Viola grypoceras</i>	•	•	•	+	+	•

表2. 天塩川に生育するカラフトモメンズル
 調査場所 北海道上川支庁名寄市天塩川 調査環境 No.1~No.9は砂地、No.10~No.19は砂礫地の河原、標高95m
 調査日 1993.8.4 調査法 カラフトモメンズル(41個体:Fr、27個体V)と隣接する植物
 V=生長期、Fl=開花期、Fr=結実期、+=季節周期不明、*印 帰化植物

種名	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15	No.16	No.17	No.18	No.19	頻度(%)
カラフトモメンズル	V	Fr	1個体Fr 5個体V	Fr	V	1個体Fr 1個体V	Fr	V	Fr	Fr	1個体Fr 1個体V	Fr	4個体Fr 10個体V	V	3個体V	V	Fr	V	V	100.0
ブタナ*		Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	94.7
ナガハグサ*		Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	89.5
ヒメスイバ*		Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	89.5
メマツヨイダサ*		Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	73.7
carex sp.		Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	68.4
シロツメクサ*		Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	63.2
コケ類		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	57.9
オオヨモギ		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	52.6
スギナ		Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	42.1
ヘラオオバコ*		Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	42.1
ヒメジョオン*		Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	Fr	42.1
ムラサキツメクサ*		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	36.8
オオアワダチソウ*		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	31.6
ツルヨシ		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	31.6
カモガヤ*		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	26.3
エゾノキンギシ*		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	21.1
Salix sp.		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	10.5
オオイタドリ		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	10.5
ハルザキヤマガラシ*		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	10.5
タチオランダゲンゲ*		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	10.5
エゾノミツモトソウ*		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	10.5
コウゾリナ		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	10.5
クサアジ		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	5.3
オオアワガエリ*		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	5.3
セイヨウタンポポ*		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	5.3
エゾニワトコ		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	5.3
オオハンゴンソウ*		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	5.3
ヒメムカシヨモギ*		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	5.3
シロサ		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	5.3
オニノゲシ*		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	5.3
ハルガヤ*		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	5.3
ウスベニツメクサ*		V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	5.3
出現種数	12	7	11	7	14	11	7	9	9	8	8	7	16	6	12	10	9	21	20	

むしろ、カラフトモメンヅルと隣接して生育している在来種に注目すると、2年草のコウゾリナ、多年草のオオヨモギ、アキノキリンソウとキク科が占め、比較的流水の近くにはイネ科で多年草のツルヨシが生育している。これらより頻度が下がってくるとマメ科のクサフジ、キク科のオトコヨモギ、イネ科のウシノケグサなどの多年草が混生している。

音更川流域だけに出現する種で注目されるのは、マメ科の多年草であるメドハギとミヤコグサ、ヤナギ科で落葉高木のケショウヤナギである。ケショウヤナギは日あたりのよい河岸の砂礫地に生えるといわれ、この幼樹とカラフトモメンヅルが隣接して生育している。ケショウヤナギの国内分布は北海道と本州（長野県上高地と梓川下流）に生育する、隔離分布の一種である。カラフトモメンヅルも北海道と本州（栃木県）に隔離分布している、と考えると同じような生育環境に適応した遺存種といえる。

カラフトモメンヅルと隣接する植物群の表1-1,2に出現する71種の科別を調べると、上位からキク科14種、マメ科10種、イネ科8種と続きこの3科で45.1%と高い割合を占める。このことは村田（1988）によるとイネ科、マメ科、キク科など進化段階の高いグループに属する種は厳しい環境のところほど高度に耐性を持って進化した種が分布している、という。この事からして、上記3科の植物が多く生育していることは理解される。すなわち、マメ科のカラフトモメンヅル自身も河原の砂礫地という厳しい環境に耐える性質がそなわって

るのである。さらに、カラフトモメンヅルの根系が地中深く網目状に発達した根には、空中窒素固定をする根粒細菌が共生しているので、窒素分の乏しい貧栄養の砂礫地でも生育する特性を備えているのである。

北海道での生育状況

カラフトモメンヅルが名寄市天塩川に生育していることを確認できたきっかけについて述べる。加藤平八郎氏の私信（1990年8月）で、北海道立理科教育センターで指導主事をしていた時（1975-1985年）、名寄方面で採集されたものと記憶しているが、*Astragalus* sp.が送られていた、との情報を得ていた。ただ名寄方面というだけで具体的な地名が不明なので、探策できないでいた。ところが、本間・畠山（1988）によると天塩川・名寄川の合流点付近で淡黄色のエゾモメンヅルを採集し、さらに天塩岳にたくさんの自生を発見した、とある。エゾモメンヅルの花の色は紅紫色であり分布地は北海道（北見：斜里岳および知床半島）、千島（エトロフ、ウルップ）に生育する植物となっているので、興味を持った。さっそく1993年7月に名寄市に現地入りし天塩川流域を探策すると、名寄大橋と恵南橋のほぼ中間地点の右岸に、カラフトモメンヅルが41個体生育していた。菅原氏が中川町でカラフトモメンヅルを採集したのは天塩川流域の可能性が高いことと、加藤氏の情報によって、天塩川流域に生育していることが新たに確認できた。さらにこの8月には天塩岳に登山をしてマメ科ゲンゲ属の

植物が生育していないかと、前天塩岳(1540 m)、天塩岳(1558 m)、西天塩岳(1465 m)、天塩円山(1433 m)のピーク周辺と登山路沿いを隈なく散策するが生育の確認はできなかった。

さらに、ゲンゲ属の一種であるモメンヅルの分布と生育環境を調べている中で、北見市在住の松木恒男氏が採集した腊葉標本のうちに、カラフトモメンヅルの標本を持っていることを知った。その標本リストを送ってもらったのをここに紹介する。1965.8.6 採集；空知支庁幌加内町朱鞠内湖畔、1971.7.12 と 1972.6.5 採集；網走支庁津別町上里天神橋たもと道路わき、1977.7.31 採集；網走支庁常呂町栄浦サロマ湖畔内陸側、1984.7.2 採集；網走支庁端野オホーツクの森、1986.6.13 採集；端野町スキー場わき、1988.5.23 採集；北見市美里クトンニコロ沢、1990.6.23 採集；網走呼人網走湖畔の道路わき、以上 17 点の標本がある。その内端野オホーツクの森で採集した標本は、当時神奈川県立博物館学芸員の大場達之氏にカラフトモメンヅルと同定を受けた(1984)、とのことである。(註；この内容は、北網圏北見文化センター、1994 年 5 月；収蔵目録第 1 集、植物標本資料目録(離弁花類)として発刊された。)

また、当時北海道興部高等学校教諭の合田勇太郎は十数年前になるが、遠軽町瀬戸瀬の湧別川の斜面に、カラフトモメンヅルの小群落があった。その群落内には帰化植物の混生はなかった。数年後に分布地の斜面はブルで切除され、礫地となり、カラフトモメンヅルは一部しか残っていなかつ

た。なお標本は同定を受けたものが 1 点ある、との情報を頂いた(1992 年の私信)。

これまでのことからカラフトモメンヅルの北海道の分布は、天塩川流域(名寄市・中川町)、湧別川流域(遠軽町・上湧別町・湧別町)、音更川流域(音更町・士幌町)、朱鞠内湖畔、サロマ湖畔(三里浜・芭露・栄浦)、網走湖畔(呼人)、網走川の支流津別川流域(津別町)、端野町から網走町にかけての丘陵地にある国有林オホーツクの森、端野町スキー場、北見市美里の国有林内のクトンニコロ沢に生育していることが判った。

今までカラフトモメンヅルの生育環境は河原や湖畔の砂礫地～礫地に生育していると考えていた。ところが、松木氏が採集した生育環境は国有林の林道、スキー場わきなど、人工的に処理してできた、明るいやや乾燥した道路ぎわに多く生育していた、との教示を得た。例え、人為的であれ礫地状の環境があれば生育できるようである。

村田(1993)によると、ゲンゲ属のように裸地に適応した植物は被陰の耐性は極めて弱い、という。この事からカラフトモメンヅルは他の植物が生えにくい礫地に生育し、他の植物との競争を避けて生活していると考えられる。一方、1989 年から遠軽町野上橋でカラフトモメンヅルの生育調査しているが、1991 年の夏に調査地一帯のカラフトモメンヅルが枯死していた。特に、良好に生育している株ほど枯れていて、掘ってみると太さ 1 cm 位の主根は朽ちていた。稀であるが、前年度の株より新しい茎を出して莢果をつけている個体もあるが、

その茎の数も少なく衰退していた。良く観察すると枯死した親株の周囲には実生で生育した幼苗期のカラフトモメンヅルが生えてきていた。むしろ、築堤法面よりの雑草と混生している小さい株のカラフトモメンヅルの衰退はみられなかった。松木氏の私信の中で、北見市クトンニコロ沢で採集したのは平地より林道に入る入口の道路わきで採集、その2、3年後その林道より枝分かれした新しい林道ができたと思ったら、その道に沿って両側に数十cmにも育ったたくましいカラフトモメンヅルがびっしりと生えていたのですが、どうしたことか現在は殆ど姿をみかけません。やがて消滅する傾向がある、との情報を得た。なぜこのようなカラフトモメンヅルは急激な衰退が起こるのか、まだはっきりとした原因はわからないが自生地で観察されている。

ともあれカラフトモメンヅルの北海道での分布域が僅かながら判明してきたが、道内においては稀少種に変わりなく、絶滅の危険がある危急種にリストされている。本州でただ一カ所生育していた中禅寺湖畔千手ヶ浜がキャンプ地のポート置場になった時、カラフトモメンヅルは絶滅したといわれている。野生生物の種の保全について話題になってきているいま、人為的な乱開発による絶滅だけは避けるべきだと考える。河川や湖畔の護岸・築堤・改修・架橋工事さらに林道工事などにおいて、せめて工事前に生育している植物は工事後にはそっくり元に戻して、現在の自然植生を守るという工事が徹底できないものかと願っている。

謝辞

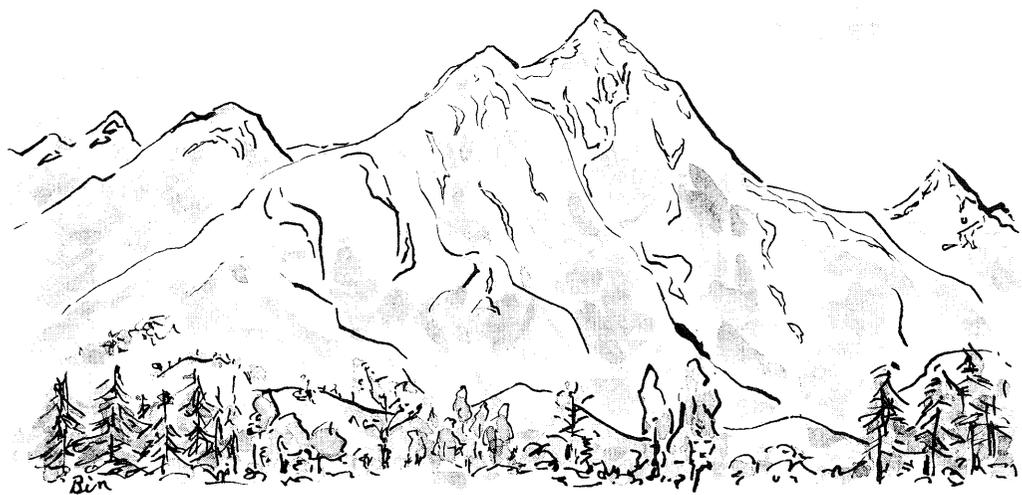
元京都大学村田 源氏にはカラフトモメンヅルの種の同定ならびに、論文の提供など多くの教示を頂いた。元帯広市立川西中学校加藤平八郎、元北海道岩見沢高等養護学校合田勇太郎、元津別町上里小学校松木恒男の各氏にはカラフトモメンヅルの生育地および生育環境に関する情報を頂いた。ここに諸氏に対し深く感謝の意を表します。

引用文献

- Goncharov, N.F., 1946: Flora of the U. S. S. R. Vol. XII, Leguminosae Astragalus 436. (英語版)
- 本間尚治郎・畠山好雄、1988: 北の薬用植物、名寄叢書第8巻: 215-218
- 環境庁自然保護局編、1988: 植物目録—1987—: 81・260・524. 環境庁
- 川名国男・市田則孝、1981: 河川の生物観察ハンドブック——河川の生態学入門——: 334 P. 東洋館出版社
- 北村四郎・村田源、1979: 原色日本植物図鑑・木本編II: 336-337. 保育社
- 松井洋・林廣志、1991: 湧別川に生育するカラフトモメンヅルの分布状況と形態的特徴について、知床博物館研究報告 13: 13-20
- 村田 源、1984: 植物分類雑記 15.74. カラフトモメンヅル、植物分類地理. 35: 34-36
- 村田 源、1987-88: 日本の植物相——その成り立ちを考える——: 1-18、日本の生物 1-2 巻

村田 源、1993：植物の進化と環境、山梨
植物研究 6：9-16
大場秀章編、1986：日光地区高等植物目録、
日光の動植物、163-249、栃の葉書房
大場達之、1984：隣接個体法による植物群
落の調査、東書生物、(238)：1-4
大井次三郎(北川政夫改訂)、1992：改訂新
版日本植物誌顕花編：918、至文堂
Schmidt,Fr、1868：Reisen im Amur-
Lande und auf der Insel Sachalin.：
37・123. St. -Petersbourg

杉本順一、1978：改訂増補-日本草本植物
総検索誌 I、双子葉編：267、井上書店
豊国秀夫、1983：シベリアの古典植物文献
あれこれ、北方山草：3-7
我が国における保護上重要な植物種及び群
落に関する研究委員会植物種分科会
編、1989：我が国における保護上重要
な植物種の現状：202・258・267、(財)日
本自然保護協会・(財)世界保護基金日本
委員会



初夏の十勝幌尻岳 絵・田中敏明